

10-5

**銀座一流クラブで
有名日本画家が取っ組み合い！**

2006年12月15日（金曜日）から21日（木曜日）まで掲載されていた週刊誌Bの中吊り広告。全体の3番目の文字サイズで赤地に白抜きのキャッチコピー。

発行部数で一二をを争う週刊誌にスクープされた銀座で数店にしか冠されないAランクのクラブ『こはる』での揉め事は、関わった人たちのせいもあり、マスメディアの格好の餌食になった。

有象無象のレポーターや雑誌記者等が開店前の『こはる』の近辺に張り込んだりウロチョロしてKビルに入っているテナント関係者に迷惑をかけていた。

とりわけ午前8時半開店の1階にある令子さんの花屋『フラワーベッド』では、1本500円のバラを1本だけ買って、探りを入れる者をはじめとして、不釣り合いな連中が出入りするの、営業妨害も甚だしかった。

そんな中でも、令子さんは嫌な顔も見せずに、大女優Kへのフォローアップも怠りなかった。

大御所男優Tは、「いろんな輩が大勢押しかけて来てくれたおかげで、新作映画の前宣伝にもなったよ。それにしても、あいつは男の風上にもおけないな。家内には横田君の作品を処分するように言い含めておいた」と電話の向こうで言ってから高笑いをした。

記事内容では被害者になる長身の人気男優と脱ぎっぷりのいい女優は、事態の成り行きからして、『人情紙風船』にキャスティングされることになった。

真紀は荒れ狂う海に船出ですのような覚悟で、通常通り店を開けた。

1年の内で特に忙しい年末にキャンセルが続出するだろうと予測していたが、しばらく遠ざかっていた客から予約の問い合わせがあったりして、多忙を極めた。真紀はゴシップの不可思議な魔力を改めて実感させられた。

当夜、横田は築地警察署4丁目交番で事情聴取をされるところを、駆け付けた真紀の口添えで穏便に済ませることができた。

正気に戻っていた横田は、土壇場での真紀の言動に心を打たれたが、なすすべもなく佇立していた。

後日、速やかに真紀は弁護士を通して、横田の未払金その他一切合切と引き換えに2点の裸婦画を貰うことで決まりをつけた。